キムラグモは日本固有：分子系統解析によるハラフシグモ類の再検討

○小野 展嗣（国立科博／九大・地球社会）・Xin Xu（Hubei Univ.）・Matjaz Kuntner（Slovenian Acad. Sci.）・Daiqin Li（Natn. Univ. Singapore）

　ハラフシグモ亜目（Mesothelae）の系統関係を初めて論じたのはPocock (1892)で、クモ目を糸疣の位置によってハラフシグモ亜目（Mesothelae）とクモ亜目（Opisthothelae）に分けた。また、前者にさらに２群があることをはじめて明らかにしたのはKishida（1923）でハラフシグモ類とキムラグモ類をtribeで分けたものである。以来、演者をはじめ、HauptやSchwendingerらによって議論が繰り広げられ、1960年代にはわずか10種しか知られていなかった本類も現在では90種以上が知られるほどに進捗した。ハラフシグモ亜目内の系統関係については、1999年に演者が6群にわけ日本産の２属が固有であることを示唆したが、ランパー（類似点を重視する併合派分類学）の立場でのSchwendingerとのコラボ（2011）では*Heptathela*が広範に分布するという結果になった。しかし、今回行った分子系統解析ではキムラグモ亜科に7群が認められ、しかも*Heptathela*と*Ryuthela*はいずれも日本固有の属であるということが判明したので報告する。